

※文字の大きさは MSゴシック /12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。  
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、適宜文章中に挿入してください。各項目の枠の上下幅は変更可能です。  
※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

エントリー名：尼崎市立尼崎北小学校 吉仲 伸隆

学校名：尼崎市立尼崎北小学校

活動名：対話とサポートが作るチーム学校 ～働き方改革と ICT 活用が相乗効果を生む～

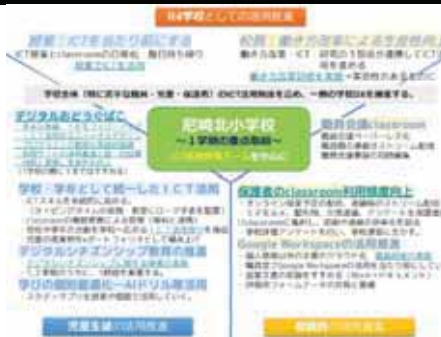
解決すべき課題：

- ①業務が多く授業づくりに十分な時間を割けない。職員のワークライフバランスの確保も必要。
- ②そんな中 G I G A スクールへの対応をする必要が。でもクラウドや ICT に戸惑う教員も。
- ③「令和の日本型学校教育」答申への対応も必要。

→ ICT を上手く使えば働き方改革が実現できる。同時進行で進めて相乗効果を狙おう！

目標・方針： 右図は本校 ICT 部会の方針→

ICT 活用は「わからなくて当たり前」として捉えた上で、**苦手な職員でもできるように丁寧にサポートして推進**する。そして、学校に関わる全員（職員・児童・保護者）の取り組みにする。短期的には、職員へ働き方改革研修を行い、意識改革と ICT による実質的な業務改善を同時進行で行う。慣れが深まればできることは増える。長期的な目線で、働き方改革と ICT 活用の取り組みを育てる。具体的には、**研究・ICT・働き方改革の 3 部会が連携することで、授業と校務の両面で ICT の活用を進める**。組織体制としては、研究部に管理職と ICT 主任が入ることによって会議を増やすことなく日常的な連携をとれるようにする。職員会議や研修など授業以外の場面で ICT を活用することで、定期的な ICT 専用の研修会を行わずに職員が ICT に慣れていけるようにする。研究テーマを ICT にせず、これまで実践してきた国語の共有活動のまま据え置くことで、「令和の日本型学校教育」答申の柱である**①学習指導要領の定着（特に協動的な学び）② ICT 活用③働き方改革の融合をめざす**。



活動内容：

**働き方改革研修（R3・8月、R4・7月）で問題意識の共有**

妹尾昌俊先生の動画（NITS校内研修シリーズ）を全職員で見て、ロイロノートを利用して意見を出し合い問題意識を共有した。そこで出された意見について、ICTを使って解決できないか、文科省の働き方改革事例集を見ながら検討した。**改革を継続的・組織的なものにするためにはそれを担う組織を作る必要があるとして、働き方改革部会を発足させた。**（R4・4月～）



**ICTを活用した業務改善・授業改善**

研究主任を中心に、夏休みに3日間集中的に ICT 活用研修を実施（R3・8月、R4・7月）し、各ツールの利用方法を**全員が習得できる場を設定**した。Chromebook、Google for Education、ロイロノートに関する基本的な知識を身に着けた。ICT活用を目的としない他の研修、職員会議などの中でも ICT を活用し、職員が**慣れていくことができる環境作り**を行った。職員が Google Classroom を介して連絡するようにして職員会議での連絡事項を減らす、会議資料を電子化してペーパーレス化する、朝会を Google Meet を使って教室で行うようにするなどに取り組んだ。また、**全学年で ICT を取り**



**入れた研究授業を実施**。授業の中での活用について理解を深めた。事後研究会ではロイロノートの新機能（共有ノート）を活用し、事後研究会の中でツールに親しめるようにした。

**ICTに関する教育環境整備で、児童が自分自身で力を伸ばせるように**

**【ポータルサイト「デジタルおどろぐばこ」を2つの目的のために作成・運用（R3～）】**

① ICT の教育環境整備 担任の知識・スキルに左右されずに全校児童が遊びの中で様々な有用なサイト（Chrome music lab など）を利用できるようにした。特に1年生でも使いやすい画像リンクを多用して活用をサポートした。サイトを一度作成してしまえば、「習うより慣れる」の発想で、教師を介さずに児童は自分の意欲関心に沿って遊びの中で習得率を向上させることができる。



ポータルサイト(Google サイトで作成)

② **プログラミング教育の系統的指導** Code.org のサイトを活用して不慣れな教員でもプログラミングを教えることができるようにしたことで、系統的な指導が可能になった。

**【タイピング検定（第1回：R4・6月 第2回：R4・10月）】**

デジタルおどろぐばこの運用によって、低学年を含む全児童のタイピング能力が大幅に伸びた。児童会役員から「タイピング検定をやりたい！」という声が上がリ、実施されることになった。習得率を補うためタイピングタイム（R4・9月 2～6年 毎日10分程度）を実施。**タイピング能力を基礎学力として育てる。**

**Classroom アプリで家庭とつながる**

保護者とスマートフォンの Classroom アプリを介して、以下の物のやり取りを電子化・ペーパーレス化した。

- ①欠席連絡②配布物③アンケート（R3・11月～）
- ④避難訓練において、緊急時に Classroom を通じて連絡する訓練を実施（R4・6月）



保護者と職員がスマホで情報共有 (Classroom)

取組の過程：

新しく着任した先生には、学校の ICT 活用の状況と方法を伝える研修を行い、スムーズに本校のシステムに慣れてもらえるようにした。全児童が ICT を安心して活用するためには、タイピングなどの基礎能力の習得が必要だと感じている。学校との連絡をアプリで行うのは保護者にとっても今までにないことであり、保護者アンケートを実施（R3・12月、R4も予定）しつつ、その意義を説明しながら丁寧にすすめた。

活動の成果：

- ・働き方改革のキックオフ研修となった昨年の働き方改革研修では、普段なかなか話題にすることができない想いを共有する場となり、その後の職員の意識改革と実質的な改革につながった。ICT 以外の部会や職員会議の場でも、「本当に子どもたちのためになっているのか」「より費用対効果の高い方法はないのか」についての意見が出るようになった。
- ・ICT 利用が進んでおり、J A E T の実施する学校の情報化認定で優良校となった。授業の中での活用だけでなく、校務においても Google Workspace のクラウド活用が進んでいる。
- ・タイピング能力を中心に、児童の情報活用能力は着実に伸びている。休み時間にはタイピングやプログラミングをして遊ぶ児童が多く見られる。

**終わりに**

私たち教員には子ども一人一人が輝けるよう、誰も取り残さない教育を進めてきた歴史がある。ICT 活用が得意な人ばかりではないという前提に立ち、苦手な教員や1年生をサポートする仕組みを作ることで、子どもも教師も保護者も、誰も取り残さないようチーム学校として取り組みを進めることができる。また、働き方改革を同時に進めることで、改革のためのリソースを生み出し、実効性のある形で子どもの学びや教師の働きがい再構築できると考える。